

川を越えて、どこまでも跳んでいった

一、サッカーボール I

青い空、白い雲、気の遠くなるような空間の広がりだった。時折風が吹いて、大地はどこまでも続き、ぼくは川岸を覆っているやわらかな草むらの上に座り込んでいた。

川の向こう岸に立っていたBは、小脇に抱えていたサッカーボールを空に向かって蹴り上げた。ボールは弧を描いて青空を横切り、やがて彼の足元に戻ってきた。Bは風のきざむリズムに合わせてるようにしながら、リフティングの妙技を披露してくれた。ぼくは空を見上げた。青い空、白い雲、気が遠くなるような空間の広がりだった。時折風が吹いて、大地はどこまでも続き、ぼくは座り込んでいた。川のせせらぐ音が、耳に心地よかった。

ふいにぼくの目の前に、白くて丸い物体が出現した。反射的にぼくはそれを両手で受け止めた。ずしつという確かな質感が、掌に熱く残った。Bが突然、ぼくにボールをパスしたのだ。ボールは川を越えて、ぼくのところまで飛んできたのだった。

Bはぼくに向かってニヤリと笑いかけた。ぼくは理由のわからない決まりの悪さと申し訳なき、そしてノスタルジーを感じながら言った。「久しぶり」

二、腫れ上がった脚

現代世界に生きるモヤシのような子どもたちは、自然の中で転げ回った経験を持たぬまま大人になってしまふ、嘆かわしいことだ——というようなありきたりな言説をしたり顔で吹聴する人もいるが、田舎育ちのぼくは、現代世界に生きるモヤシのような子どもであるにも関わらず、自然と戯れて幼年時代を送ったものである。

そう、とかく時間だけは不自由することなく浪費できた子供時代のぼくは、友だちと連れ立って田園地帯を思うさま駆け回ったものだ。蝉も捕ったし、トンボも捕った。あぜ道を掘りくり返し、ヒルを捕まえたりもした。田んぼを泳ぎ回るカブトエビ——カブトガニを小指ぐらいのサイズに縮小したような、武装したオタマジャクシのような生物。今では、ついぞ見かけることもなくなってしまったが——も捕った。オヤツがわりに野生の花の蜜を吸ったり、空き地に穴を掘って秘密基地を作ったりもした。そして、街から自転車で十五分ほど走ったところに聳え立っている山に行き、山遊びに興じたこともある。幼馴染で、小学校の同級だったBもいっしょだった——その時のことを語ろう。

山に行く時は、お菓子を用意し、まず学校の門の前に集合した。そして自転車に跨ると、隊列を組んで出発する。五、六人の子どもらが、魂を空の向うに蹴飛ばして、自転車で疾走している。地元住民たちはこれを大いに嫌った。自転車の並走は通行の邪魔になるし、たいへん危険だというのだ。事実そうだった。しかしぼくたちは気にしなかった。なにしろ魂が空の向うに飛んでいってしまったので。

山の中でお気に入りの場所は、散策路コースからちよつと外れたところにあった。そこには太い川が水しぶきを立てて流れ、高い木立が空を隠していた。川底から突き出した岩にぶつかつた水がしぶきを上げ、それに煽られて魚が跳ねていた。木漏れ日が行く本も筋を描いて降り注ぎ、鳥の鳴き声や川のせせらぎに反射して拡散していた。勿論、山歩きに来た大人たちなどは、誰一人としてこの素敵な場所を知らなかった。なんて間抜けな話だろう、とぼくらは笑いあつた。木々の間をすり抜けて吹いてくる風が心地よかつた。時間は、いつだって好きなだけあるはずだった。

誰かが、「川の向こう岸まで跳ぼうぜ」と言い出した。この提案は、熱狂的な賛同をもって受け入れられた。なぜなら、少年たちはみな、冒険するために生まれてきたのだから——残念ながらぼくは違つたが。「それ、やろうぜ！」「こんな川、バク宙して跳んでやるよ」「誰から行く?」「とりあえずジャンケンしようぜ」こうした積極的な会話に、ぼくも空元気を振り絞って対応した。実際のところ、ぼくは戦々恐々としていた——山に来た高揚感も、一瞬でどこかへ消えてしまった。ぼくはひどい運動音痴で、この太い川を飛び越せるかどうかは微妙なところだった。ぼく以外には、もう一人だけ戦々恐々としていた奴がいて、彼は虚勢を張ることすらも出来ずに顔を青くしていた。彼はいつも教室の片隅にいて、重たい瓶底眼鏡をかけ、給食の時間には胃弱のために牛乳を残し、そのことで「お前、なんでいつも牛乳残してんだよ」と同級生の力が強く意地の悪い男子に難癖をつけられ、塩漬けにされた青菜のごとく縮こまるようにして日々をやり過しているという、運動音痴というよりは『生きること』『音痴』とでも称すべき少年だった。ぼくとそいつは思わず目が合い、そしてすぐにそらした。まあ、仕方がない、少年の世界では、弱虫への配慮などなくて当たり前なのだから。

じゃんけんの結果、ぼくは四番手になった。ぼくの前に跳んだ三人は、いずれもうまく低空を

飛行し、対岸に到着した。ぼくたちは、彼らが着地のポーズを決めるたび、大きな拍手をし、歓声を上げた。ぼくは恐怖を誤魔化すために、ことさら大きな音で手を打ち鳴らし、ことさら大きな声を張り上げた。そして、いよいよぼくの番が来た。ぼくは「じゃあ俺、行くぜ！」と明るく雄たけび、みんなの声援に答えた。なぜなんだろう、この残酷極まりない声援が、ある種の励ましのように感じられてしまうのは？――

結果、ぼくはなんとか成功することができた。ただ、着地点に横たわっていた倒木が、ぼくの右足の裏とふくらはぎをざっくりと切り裂いてしまった。みるみるうちにぼくの脚を血が赤く染めていった。ぼくは目もくらむような痛みを感じつつも、それを押し隠し、向こう岸で拍手を送っている同志たちに手を振って、ガッツポーズをとった。なんとって、少年はどんな時も元気でなければならぬのだから。

ぼくの次に跳んだのがBだった。Bはサッカーボールをぼんぼんと地面にぶつけ、余裕の笑みを浮かべていた。そう、Bはわざわざ山にまでサッカーボールを持参していた。彼はどこに行く時もサッカーボールを持って行くのだった。

「はまるぜ、はまるぜ」もうすでに跳躍に成功した奴らが、楽しげに煽り立てた。ぼくも足の痛みに脳髓を痺れさせながらも、高笑いをし手を打ち鳴らした。

「へでもねーし、こんなの」Bは笑いながら言った。

そしてBはボールを高く掲げ、「このボールを川に放り込んで、それを足掛かりにして渡ってやる」というようなことを宣言した。少年たちは歓声を上げた。それはまるでテレビの中の忍者がやっつてのけるような、とても魅力的な技巧であった。と同時に、どう考えても不可能にしか思えない、間抜けで滑稽な試みでもあった。だれもが笑い転がっていた――最後に跳ぶ予定の、見えないられないほど脅えきっている奴を除いて。

Bは何度カリフティングをした後で、おもむろにボールを水面に蹴りこんだ。思いの外流れは速く、川はあつと言う間にボールを運び去ろうとした。Bは跳躍しようとした体勢のまま、つまり奇妙なへつぴり腰のまままで慌ててそれを追いかけて、ぼくたちはドッと笑った。Bは大慌てで岸辺の土を蹴り、ついに跳び上がった。そしてなんとか、ほんの一瞬だけ、片足がボールにかかりはした。次の瞬間、盛大な水しぶきを上げてBは沈没した。観客の笑いは最高潮に達し、さすがにこの時ばかりはぼくも足の痛みを忘れてしまった。「やべえ、腹が、腹がいてえ！」ぼくの傍らを駆け回りながら、誰かが言った。

しばらくして、ようやくとボールを捕獲したBは、全身ずぶぬれ、昔の怪奇映画に出てくるオバケのように湿った髪を顔中に貼り付けて川から上がって来た。ぼくたちは最大級の拍手と歓声と口笛でもって、この滑稽かつ勇猛な英雄の凱旋を祝った。彼は跳躍に失敗したにも関わらず、一瞬にして今日一番のヒーローになってしまった。そう、彼こそ少年の鑑だ――あるべき戦士の姿がそこに在った。ぼくは興奮の雄たけびを上げながら、こっそりと脚をなげてみた。掌に、じつとりとした血の感触を覚えた。

最後に跳んだのは、例の臆病な奴だった。この時ばかりは、お調子者たちの扇動もぎこちなかった。無理がある試合であることが、火を見るよりもあきらかだったからだ。Bは、情のこもった声で「がんばれ！」と叫んだ。だが、選手は萎縮する一方だった。

再び、盛大な水しぶきが上がった。今度は誰も笑わなかった。臆病者の青ざめた顔が水面から飛び出した。が、すぐにまた川の中に引き込まれてしまった。流れは彼をキリキリと翻弄し、じ

わじわと押しつぶしつづつあった。

「あれ、やばくねえか？」誰かが言った。

「やばい！」誰かが叫んだ。

即座にBが飛び込んだ。そして、臆病者を抱きかかえて対岸へ泳いで行った。岸に着くと、Bは渾身の力でもって臆病者を上に押し上げようとしたが、完全にゲシュタルト崩壊を起こしている臆病者は体を固くしもがくばかりで、却ってBの救済を阻んでいるかのようだった。岸の上で待っていた少年たちが見かねて、臆病者の手をつかんで引き上げた。臆病者は釣り上げられたばかりの魚のようにひくひくと全身を痙攣させ、口から水を垂らしていた。一番手が一生懸命その背中をさすりながら、「この、バカ、この、ドジ」と罵った。「先生に言うなよ！」と二番手が釘を刺した。ぼくは——臆病者に同情しているどころではなかった。脚の痛みが鋭さを増していた。涙がこぼれるかと思った。

Bは岸辺に座り込んで呼吸を整えていた(さすがに、さっきの救助劇はこたえたらしい)。しかし、ぼくの微かなうめき声を聞いて振り返り、ぼくの真つ赤に染まったズボンと靴下を見て目を丸くした。「お前、どうしたんだ、その足！」

「いや、ちょっとすりむいて」とぼくはお茶を濁した。

「やばいって」Bが駆け寄って来た。ぼくは思わずそれを制した。

「いいって！」ぼくは低く言い放った。「大丈夫だってばよ！」

結局大丈夫ではなかった。縫いこそしなくてよかったものの、傷口から変な菌が入ってしまったらしく、ぼくの右足は熱を帯びてグロテスクに腫れ上がってしまった。ぼくは肥大した足をひきずったまま、三週間ばかり苦しむ羽目になった。患部の熱が脳髓まで伝わるせいか、その時期には変な夢ばかり見ていた。脚がとどまることなくどんどん腫れていき、とうとうパーンと弾けてしまったり、膨れ上がった脚が気球の役割を果たして、ぼくの体が天空高く舞い上がってしまったり、仕舞いには脚のみならず全身までが腫れ、膨れ、いつしかぼくは一個の球体となってしまう——そしてどこからかBが現れて、球体になったぼくを小脇に抱え、遊びに行ってしまうのだった。自分の体がサッカーボールになる夢なんて、あの時が初めてだったし、これからも見ることはないだろう。

三、夜の中の故郷

Bが死んだのはぼくが大学生四年の時だった。実家からかかってきた一本の電話が、その知らせを告げた。彼とは中学校を卒業して以来、一度も会っていないかった。たつぷり六年と数ヶ月、会っていないかった。そしてこれから、もう二度と会うことはない。

ぼくは衝撃を受けたものの、悲しみというよりは、戸惑いのようなものばかりがぼくの中を満たして、どんな気分で彼の死を受け入れればよいのかわからず仕舞いだった。

「週末お葬式があるんだって。あんた、行く？」

「——いや、ちよつと戻れそうにないな。卒論とか院試のこととかで、学校が忙しくて——」

「そう。残念ね。」電話口の向うで家族がため息をついた。

その通り、まったく、残念だ。ぼくは電話を置きながら、そう呟いた。幼馴染が死んでしまうなんて、なんだか自分を取り返しようにもない老人になってしまったような錯覚に陥る。さつき自分が言った台詞が、胸の中で反響していた。『いや、ちよつと戻れそうにないな』——

——それは嘘だった。戻ろうと思えば戻れたのである。卒業を間近に控え、やらなければいけないことは色々あったが、ぼくは何もする気が起きず、何かをしようとも思わなかった。卒業はあきらめ、留年を決意し、ぶらぶらと日々をやり過ごしていた。Bの死を知った日だって、何も勉強することもなく、先輩の部屋で夜を明かしたのだった。

先輩はぼくより四つ年上で、なんだかつかみどころのない、よくわからない人だった。先輩の彼氏はずっとロンドンに留学していて、ちつとも帰って来なかった。もう終わってるのかもしれないわねえ、あいつとは。彼女は笑いながらそう話していたものだが、その言葉には自嘲の色や悲しみの色がまったく見られず、本当にこの人はロンドンにいる彼氏のことを想っているのだろうか、と疑問に思ってしまった。先輩は彼氏の留守をいいことに、しょつちゆう知り合いの男を部屋に招いていた。まあぼくも招待に与ったクチであり、罪悪感にさいなまれもしたが、先輩は「なに気にしてんのよ、あいつだってイギリスで何してるかわかったもんじゃやない」と笑い飛ばすのだった。というようなことを書くと、非常に嫌な女のようなだが、全然そんなことはなかった。テーブルの上にドライフラワーが飾られた部屋で、たばこを吹かしながら爪を磨いている彼女の横顔を見ると、そもそもこの人は何かが違う種類の人間なのだ、という確信が生じるのだった。たぶん先輩は、そんなに悪い人ではないのだろう。ただ少しだけぼくらとは違うんだ、そう思った。

ぼくは毛布とシーツにはさまれながら、ぼんやりと昼間受けた電話のことを思い出していた。どうしたの、と先輩が、顔に落ちかかってくる髪の毛を払いながら言った。いえなんでもないです、ちよつと気がかりがあつて、とぼくは答えた。ふうん、と先輩は言つて、体を起こした。そして彼女は、ノドかわいた、と言つて立ち上がり、キッチンに消えて行った。はねのけられた毛布が、ゆつくりと元の状態に戻つてゆくのを見ながら、ぼくは長く息をはいた。

先輩は缶ビールを二本持つて戻ってきた。彼女はベットの横に立つと、まあ飲みなよ、と言つてそのうちの一本をぼくに手渡した。そして彼女はこ気味よい音を立てて缶を開けると、立つたままですそれを飲み始めた。窓から入ってくる夜景の光が、存外に華奢な体躯をぼんやりと浮かび上がらせた。ぼくはよく冷えた金属性の缶を眺めながら、子供の頃山へ行った時に、この手のひらに感じた川の水の冷たさと、今感じているそれとは全然別物だな、というようなことを考えて

いた。

「で、気がかりって？」

そう尋ねながら、先輩はするりと毛布の中にもぐり込んだ。

「昔の友だちが死んだんです」気がつくのと、ぼくは素直にそう答えていた。

「——それは悲しいねえ」と彼女は言った。

「もう何年も会ってないんです」とぼく。

「どんな人？」

「明るい奴で、サッカーが好きでした——」

「そう」

そのまましばらく、ぼくらは沈黙の時を過ごした。先輩はたばこに火をつけた。寝煙草はよくない習慣だが、やめられないらしい。

「事故だったそうです」

「かわいそうね」

一応、事故だということになっていそうだ。死体は長野県の山中で発見されたそうだ。

「お葬式には行くの？」

「いや、行かないつもりです——」

そう、と呟いて、先輩はたばこを唇から離し、ぼくの目の前にぬっと突き出した。ぼくはたばこを吸わないので、やんわりとそれを制した。彼女は行き場のなくなったたばこを灰皿に置き、ため息をついた。

「なんかおなかすいちやった」先輩はその言葉で沈黙をやぶり、またぞろ起き上がってキッチンへ消えて行った。忙しい人だ、とぼくは苦笑いした。そしてまあ、よく食べる人だ。ほんの数時間前、ペペロンチーノをお腹いっぱい食べていたというのに。彼女の吐息の中には、ガーリックの香りが、ほんの微かに感じられもするというのに。

そんな食いしん坊の先輩が、あんなに痩せて——正直に言って、やや不健康なほどに痩せているというのも、不思議な話だ。しかし、痩せている友人知人を一人ひとり思い浮かべてみると、彼らはみな一様に食いしん坊だったような気もしてくる。ひよつとすると彼らが食べた食べ物、胃に入る直前にどこか別の世界へ転送されているのかもしれない。

黒糖パンで作った、レタス入りのツナサンドを手に、先輩が戻って来た。先輩はいつも手際よく料理をするのだった。彼女がサンドを咀嚼し、ノドをほんの少し波打たせてそれを飲み下すのを眺めていると、「ほしかったら作ってきてあげるよ」と言われた。

「いや、いいです」

「すぐにできるよ」

「いや、あんまり食欲ないんで」

「そっか」先輩は再び、サンドに集中し始めた。

人死にの話なんかしたのはまずかったかな、とぼくは少しだけ後悔の念を抱いていた。しかし先輩はそんなことは気にしていないらしく、親指についたマヨネーズを舐めシートの上にこぼれたパンくずを床に払い落とすと、テレビの電源を入れた。ブツツという無粋な音が静寂に穴を開け、スクリーンが白く光った。衛星放送で、ドキュメンタリー番組をやっていた。ナレーションも入らず、静かなBGMが流れるだけ、時折申し訳程度に画面の下部に説明の字幕が入るのみと

いう、深夜に布団の中で見るにはうってつけの番組だった。カメラのレンズは、延々と続く大草原の映像をぼくらの眼前に運んでいた。それがどこなのかは、途中から見たのでよくわからなかったが、なんとなくモンゴルかその辺りの平野であるらしいことは知れた。ともかく、ぼくも先輩も、一度も行ったことがない場所であろうことだけは知れた。

「いいねえ」しばらくして、先輩が呟いた。

「ええ、いい風景ですね」とぼくも頷いた。

「不思議ねえ」と先輩はため息をついた。「なんか懐かしく感じるのよね、この風景。一度も言ったことがない場所の風景なのに」

ぼくも同じようなことを考えていた。先輩はとうに火の消えてしまったたばこをつまみ上げ、唇の間にそっと挟んだ。

「結局、故郷は外在するものじゃなくて、内在するものなのかもねえ」

「そうかもしませんね。」

先輩は、くわえていたたばこを再び灰皿の中に捨てた。そして、部屋の隅に置かれたCDコンポのところまで気だるそうに這って行った。がさごそとCDの山をかき回す音、コンポの蓋が開く音、CDが読み込まれる音、それに続いて、無機質なドラム、電子によって作り出されたビブラフォンとアコースティック・ギターの音、シンセ・ストリングス、表情のないボーカル、などが飛び出してきた。ぼくは少し面食らった。というのも、先輩は自他共に認めるジャズ狂およにプログレ狂であり、今現在かかっているようなポップスを聴くような人間ではないはずだったからだ。

「これ歌ってるの、私と同郷の歌手なのよ」先輩は毛布にもぐりこみながら、そう言った。「十一年くらい前に、タイアップ曲でちよっとだけ売れた。もう今じゃ、事実上引退状態だけだね」

「この歌、聞き覚えがあります」とぼくは言った。

「退屈よね。どうってことのない曲でしょ」

「——正直、どうってことないですね」ぼくは少し申し訳なさを感じながらそう言った。本当にどうでもいい曲だったのだ。量産され、消費されるだけのポップス。砂糖とミルクチョコレートでコーティングされ、大売出し中のスーパーマーケットみたいなCDショップに平積みされる。ぼくは別にそれが悪いとは思わないが、しかしいいとも思わない。

「そう、どうってことのない歌」先輩はそう言った。「この人の故郷——私の故郷にぴったりね」先輩は新しいたばこに火をつけ、深々と煙を吐きながら話を続けた。

「私の故郷——昔は養蚕でさかえたそうだけど、私が生まれた頃にはその産業はとつとくに絶えてたわ。ねえ、養蚕でさかえた町なんか昔はいくらでもあったわよね。じゃあ、どうやって私の町を探し出せばいいのかしら？」

ぼくが肩をすくめてみせると、先輩も肩をすくめた。

「私が生まれ育ったのは、どうってことのない街だった。どうってことのないニュー・タウン。新幹線の窓から見える、誰の記憶にも残らない風景の片隅。小奇麗な家々、小奇麗な道路、小奇麗な街路樹、小奇麗な学校、そしてせわしなく行きかう、小奇麗な人々、彼らは小奇麗な犬を連れ、小奇麗なケーキを買い、小奇麗な恋をする。ちょうど、この歌手が歌っているような世界が、そのまんま展開していたわ。そう、私はそういう世界にずっといじめられて来たわ」先輩は灰皿の中に、灰を落とした。灰は砕けた星のカケラのように瞬いて消えた。

「私は小さい頃から思ってたわね。何かがおかしい。何かがわざとらしい。あの笑顔を浮かべた人々、色とりどりのチューリップを売る街角の花屋さん、校舎の真っ白い壁、ビルの向う側に広がる空と海の境目、全部が違和感のかたまりだった。サルトルじゃないけど、吐きそうだったよ。

で、いまだになんでそんなことを思いついたのかわからないけど、『この街のどこかに、死体が埋まっているに違いない』って信じるようになったのよ」

「死体が——」

「そう、死体が。」先輩は奇妙な笑みを浮かべた。「桜の木の下には死体が埋まっていると言う——有名な話ね。とは言え、幼い日の私はそんなこと知らなかった。でも、それとおんなじようなことを考えたのよ。」

この街がこんなにうさんくさいのは、どこかにおぞましい腐乱死体を隠していて、それを悟られまいとしているに違いないと踏んだのよ。だって、そうじゃなければ、私はどうにも納得がいかなかったのよ。もし街のどこかに死体が埋まっているんだとしたら、あの笑顔を浮かべた人々も、色とりどりのチューリップを売る街角の花屋さんも、校舎の真っ白い壁も、ビルの向う側に広がる空と海の境目も、なんであんなにソラゾラしいのか、合点がいくわ。

——だから私は死体を探すことにした。それは所詮は、子どもがよくやる宝探しごっこみたいなものだった。でも私は本気だったわよ。私はある時は団地を歩き回り、ある時は大通りを探索し、ある時は全然知らない区画へフィールドワークに行って迷子になったりもした。でも私はあきらめなかったわ。確信があったからね——。

で、お昼休みの学校の校庭で調査をしている時、先生に聞かれたの。『何か探し物でもしているの？』私ってバカだからバカ正直に答えちゃったわ。『はい、この辺にシタイがあるはずなんです！』

ぼくは不謹慎ながら噴出してしまった。先輩も笑った。歌手はコンポの中で歌い続けていた。「それから色々とおほらしいことがあったわ。スクール・カウンセラーに呼び出されて話を聞かれたり、懇談の時に親に『お子さんには、少し問題があるかもしれません』って言われたり。親はショックを受けてたわね。もう二度と死体探しごっこなんてするな、ってたっぷり油をしぼられたわ。」

「諦めなかったんでしょ？」ぼくはそう尋ねた。

「もちろん」先輩は微笑んだ。「ただ、もうそんなやり方で探すのはやめたけどね。死体だってそんな安易に、そこらへんに隠れてるわけじゃないし。だって、外在する故郷は故郷じゃないんだもの。そこに死体を探したところで、出てきやしないわ。こうなったら、長期戦よ。私は腹をくくったわ。」

今でも探して続けているよ。たぶん、私自身が死体になるまで、続けるんでしょうね」

そう言うって先輩は、大きなあくびをした。

四、温水プールに帰る

ぼくは、東京のアパートの一室で年を越し、そして春を迎えた。暦の上での冬は乗り越えたものの、何もかも解決せぬまま、片付かない荷物ばかりがぼくの周りを取り巻き、クスクス忍び笑いを漏らしていた。

大学四年生の課程が終了した。卒業する者、院に進む者、社会人になる前に思い残すことがないよう羽目はずしてつるむ者、そんな者たちが、まだ寒さの残る街路を、コートのか裾を翻しながら颯爽と歩いてゆくのだった。ぼくはインスタントコーヒーにクリームを垂らし、その白い筋がゆっくりと溶解していくのを飽きずに眺めていた。ぼくの背中には、質感をともしなわなないトコロテンのようなものが圧しかかかっていて、払っても払ってもまとわりついてくるのだった。そんなわけで、ぼくは久しぶりに故郷に帰ることにした。これ以上、ここに居ては、いたたまれない気分が膨張し続けるばかりで、どうにもしようがない。とりあえず帰ろう。戦略的撤退、という言葉がぼくの脳裏に浮かんできた。

そう、戦略的撤退。そしてその戦略は見事失敗した。故郷に帰った方が、よほどいたたまれなかった。ぼくは隙間風が吹き抜ける実家の部屋でまどろみながら、つとめて何も考えないようにしていた。家族から発せられる諸々の問いには適当にお茶を濁し、濁したお茶は飲み下してしまった。たまに、気晴らしで昔の友人と酒を飲んだ。友人たちの背中には、ぼくが背負っているのと同じようなトコロテンがへばりついていて、ああ、これが故郷というものか、とぼくは肩をすくめた。夢の総量は空気であった。がっかりだ。

ぼくが生まれ育った街はずいぶん様変わりしていた。しかし、情けない部分だけはちゃんと沈殿したまま残っていて、しかもそれは発酵していた。

——どこだここは？

——俺の生まれた街だよ。

——それがどうした？

——どうもしないんだな、これが。

自問自答を繰り返しているうち、すきっ腹が間抜けな音を立てた。ぼくはぼりぼりと頭を掻き、寝返りを打った。そう言えば昼飯を食っていなかった。台所に何かあったのだろうか？

そうだ、きっとこれは外在する故郷に過ぎず、外在する故郷は本質的な「故郷」ではないのだ。ぼくは戯れにそう思うようにした。——では、内在する故郷はどこなのだろう？ ぼくは我が胸を撫でつける。もはや内なる故郷は、消滅してしまったのだろうか？——

そんなある日、ぼくが昔遊びに行った山の麓に、温水プールの施設が出来たという話を聞いた。そう、いつぞやぼくとその遊び仲間たちが、木漏れ日の降り注ぐ中、川を跳び越えて遊んだ、あの山である。

温水プール施設の横には、ゴミ焼却場がある。というより、ゴミ焼却場を作ったついで

に温水プールを作った、という説明の方がより正確だ。ゴミ焼却場で発生した熱を利用して、プールの水を温水にするという話。「これこそコジェネレーション・システムの面目躍如。二十一世紀にふさわしい、環境問題に配慮したあっぱれな施設である」と市長が推進して作られたのだとか。まあその裏には、「近隣住民から疎まれる廃棄物処理施設をどこに作るか」という問題をめぐるどろどろの駆け引き、施設を作る土建業者との癒着、出所のよくわからない予算、などなど、多くの生々しい醜聞があったという噂だが、それを別にしてもコジェネレーション・システムは素晴らしいのだそうである。エネルギーの再利用、地球に優しい、素晴らしい。しかしいくらコジェネレーションが環境に優しいと言っても、あんなに美しかった山の麓を無理やりに切り開いてしまったことは、どうしたって環境に悪いような気がしてならない。とは言え、ゴミ焼却場はどこかに作らなければどうにもならないのだから、仕方がないことなのだろう、たまたまそこが、ぼくの思い出の風景であったとしても、それは仕方がないことなのだ。ぼくは思慮分別のあるつまらないニンゲンになったので、「仕方がないことなのだ」と断言してしまえば、大抵のことはそれで納得することが出来るようになった。——そう、仕方がないことなのだ。

ぼくは他にやることもなかったもので、その温水プールに行ってみることにした。ぼくは自転車に跨り、本当に久しぶりにあの山を目指して出発した。田園地帯の中を通る田舎道はきれいに舗装されて、その周辺には新しい住宅街がたくさんできていた。高齢になって農業ができなくなった人々が、畑や田んぼを二束三文で不動産屋に売り、そして不動産屋はそこへ安物のアパートや住宅を建てる。こうして、田園風景は少しずつすり減ってゆく。仕方がないことだ、とぼくは胸のうちで呟いた。それですつかり、納得した。

二十分ほど田舎道を走って、山の麓に到着した。温水プールの施設はまだ真新しく、外壁は緑色のタイルがびっしりと張られていた。ぼくは周辺の木立の緑色を眺め、それからタイルの緑色を眺め、「そんな色使いで擬態したつもりか、この間抜けめ」と心の中で毒づいた。だが仕方がない。ぼくはどう考えても流行っているようには思えないこの「あっぱれな施設」の中に入った。

建物の中は薄ら寒い空気が沈殿していて、暇を持って余した老人が何人かフラフラと歩いたり、座ったりしていた。ぼくは受付嬢——古狐のような顔つきをした、陰気な女の子——に金を払い、脱衣所へむかった。(どうもその受付嬢は、ぼくの小学校か中学校の時の同級生であるように思えたのだが、確かめずじまいだった。確かめたところで、何かが変わるわけじゃなし。)

温水プールにはほとんど人がおらず、貸切状態だった。これは贅沢に楽しめるぜ、とぼくは喜び勇んで水中に飛び込み、縦横無尽に泳ぎ回ってみたのだが、ものの五分もしないうちに飽きてしまった。貸切のプールで泳ぐのは、少年時代の夢の一つだったのに。ぼくは不恰好に脂肪のついた我が身をプールサイドに引きずり上げ、そして振り返りもせず出

て行った。

階上にはジャクジーがあるそうだ。そこで一風呂浴びることにしよう。

ジャクジーには二人の先客がいた。二人とも老人だった。一人は、身体は竹串のように痩せ細っているが、禿げ上がった頭部だけは肉付きがよく、黄色い目玉をきよるきよると動かしながらせわしなく辺りを見回しており、その仕草はどこも二ワトリを思わせた。もう一人は潰れた饅頭のような肥満体で、顔の中心に埋まってしまった唇をもごもごと動かしながら何事か呟き続けていた。泡が立てる音に邪魔されつつも、ぼくは耳をすませて彼の呟きを聴き取るうとしてみたところ、「大東亜」「玉砕」「大和民族の」「決戦」といった単語が微かに空中を飛んでいるのがわかった。ぼくはゆっくりと肩を湯の中に沈め、腰や背中に勢いよく吹きつけられる泡の感触をじっくりと味わいながら、ああ俺は何だかともんでもなく遠くまで来てしまったようだ、と思った。

ずいぶん長い間浸かってから出たのだが、ニワトリ男と饅頭男はぼくが出た後も依然として浴槽の中に身を埋めたままで、一向に上がる気配を見せなかった。きつと、彼らの中を流れる時間と、ぼくの中を流れている時間とは、全く異なるものなのだろう。そんな気がした。

ぼくは無料で貸し出されている浴衣に着替えると、休憩室に置かれた寝椅子に横たわり、目を閉じた。そして、昨日いっしょに酒を飲んだ友人のことを漫然と思いおこしていた。その友人と会うのは四年ぶりのことで、四年という歳月は思いのほか多くのものを変えてしまうのだなと感じた。

彼は地元の大学に進み、そして無事に卒業した。この春から受験関連の会社に就職し、幼児向け英語教材のセールスをやるのだそうだ。

つまらないことばかりに記憶力が働くぼくは、彼がかつて軽音楽部の部長を務め、学園祭ではいつもヒーローで、卒業文集には「**将来の夢・クインをこえるバンドを結成してメジャー・デビュー、世界規模ツアー敢行!**」なんてメッセージを太いマジックペンで大書きしていたことを、すっかりと覚えていた。そして彼が、自分の父親——ごくごく普通の勤め人——のことを指して「俺はああはならない。俺は平凡に耐えられないから、親父のように生きない、いや生きられないんだ。俺は俺の才能で人生を切り開く」と息巻いていたことも。

思うに、四年という歳月は、彼をリアリストに変化させるに十分なだけの重みを持っていたのだろう。とは言え、青春の真っ只中で、肩で風を切って歩いてきた時代の彼だって、まさか本気でロック・スターを目指していたわけではないのだろうけれども。

しかし、ぼくは別にそれが悪いことだとは全く思っていない。ぼくたちの生きざまというものは、基本的にそういうものだからだ。

少なくとも、就職先が決まっているだけ、ぼくの境遇よりはましである。

まあ、そんな湿っぽい話はさておき、彼と酒を酌み交わし、思い出話に話を咲かせているうちに、ふとBの話になった。

——あいつの葬式に来なかったよなあ、お前。

——ああ、すまん。

——俺に謝ってもしようがないよ。

彼の話では、Bの葬式は無宗教で行われたそうである。(それにしても、「無宗教の葬式」というのはおかしな話だ。葬儀という行為自体が宗教行為に他ならないのに。)式では、陰鬱な調べの古典的なピアノ曲が延々と流れ、みんなで項垂れたのだという。所謂、音楽葬というもの。でもあいつ、クラシック大嫌いだったんだけどな、成仏できたのかな、と友人は首をかしげていた。

なんであいつ死んだんだろう、とぼく。脳挫傷らしい、と彼は言った。溺死の可能性もあったらしいが、川床に頭をぶつけたのが直接の原因だってよ。いや、死因の話じゃなくてだな……と言いかけたが、僕は口をつぐんだ。

まあ、単なる事故じゃないかもしれない、と言うのはみんな思っていることさ——そう言って彼は盃に酒を注いだ。でもまあ、実際のところどうだったのかは、B本人しか知らないんだよ。だからもう永久に、わかりやしないよ。

Bは、長野県のある山の麓、ちよつとばかり木立が生い茂っているところを流れる浅い川に横たわっていたらしい。彼の死体は、キノコ狩りに来た家族連れが発見したのだという。不謹慎だが、ぼくは笑ってしまった。いや、笑うしかない、と言うべきか。キノコ狩りに来た家族連れに見つけられてしまうようなところで伸びているなんて、一体どうしたんだ、あいつは。よし、美味しいキノコを探しに行くぞー。あんまり走っちゃだめよ、山道は転びやすいんだから！パパ、なんか川に人が浮いてるよ？

そんなところでそんな風にBが死んだとは思えない。少なくとも、あいつが川の中で死んでいただなんて、冗談にちがいない。みんなで川を跳んだ日も、Bの活躍は目を見張るほどだった。そう、それはどうせ、何かの冗談なんだよ。タチの悪い話だぜ、まったく。なあ、お前もそう思うだろ？

「気持ちにはわかるが、それはあくまでお前の勝手な意見だよ」彼は飽きもせず日本酒を飲みながら言った。「Bの死体は確かに長野県の山中で発見されたんだよ。検死解剖済みさ。間違いはありえない」

しかし果たして、それはBの死体だったのだろうか。仮にBの死体だったとして、それがどれほどの意味を持つことなのだろうか——？

ことによるとBの死体は、内在するぼくらの故郷のどこかに、今も隠れたままになっているのかもしれない。そんなことを考えて、ぼくは黙々と焼酎を飲んでいった。

×××××

しばらく眠りに落ちていたようだ。目が覚めると、休憩室にいるのはぼく一人だけだった。

ぼくは静かに四肢を伸ばし、小さなあくびを一つした。——さあ、帰るとするか。

しかし、どこに帰るのか。外在する故郷は故郷ではない。では、内在する故郷へ——？
どうやって？ ——。

ぼくはゆっくりと寝椅子から起き上がり、脱衣所に戻って服を着た。ところがおかしなことに、脱衣所にもぼく以外誰もいなかった。おかしいなあ、いくらから空きだったとは言え、たしかに何人かは客がいたはずなのに。

その後、ふと受付をのぞいてみると、受付嬢までいなくなっていた。ぼく一人だけを残して、みんな帰ってしまったのだろうか。ぼくは言いようもない寂しさを覚えた。あの、ジャグジーに浸かっていた二人の老人——ニワトリ男と鰻頭男——、彼らもまた帰ってしまったのだろうか、それともまだ依然として、泡の中に埋没しているのだろうか。

外に出ると、ぼくは遠慮がちに空気を吸い込んだ。木漏れ日に染められた冷たい大気が、くるくると回転しながらぼくの中に入って行った。暦の上では春が来ているとは言え、まだ肌寒い今日この頃である。

ふと、水のせせらぎが聞こえてきた。さつきは気がつかなかったのだが、施設の裏手、建物から二十メートルほど離れた木立の中を川が流れていた。ぼくはそのせせらぎの音に導かれるようにして、大地を覆い尽くしている腐った倒木や絡み合った蔓、たつぷりと露をふくんだ雑草などに蹴つまずかないようにしながら、慎重な足取りで川岸まで歩みを進めた。

無粋な護岸工事が施され、コンクリートで押し固められ、すっかり変わり果てた姿になっていたものの、それはおそらく、ぼくが幼い日に遊んだ川であるような気がした。ぼくは空を見上げた。空は木立に隠れていて、木漏れ日が目に心地よかった。この川をたどっていけば、あの遊び場所に帰れるかもしれない。何の根拠もなく、ぼくはそんな確信を得た。そして、根拠がないほど確信は深くなるものであり、ぼくはゆっくりとした足取りで、川の上流へむかって歩き始めた。

——だが不思議なことに、いくら上流に向かって歩いていても、気がつく
とぼくは下流に向かって歩いているのだった。不可解な出来事だった。しかし、例えば世の中には二重螺旋の階段を持つ塔というものが存在する。この塔は、屋上に向かってどんどん階段を上ってゆくうちに、いつの間にかそれが下りの階段に入れ替わってしまうのだ。この川もそれと同じことなのだろう、上流にむかって歩いて行けば、自然とぼくの行き先は下流の方角になってしまうのだろう——そんなことを考えた。

それからどれぐらの時間、歩き続けたことだろう。わからなかったし、わかる必要もなかった。ぼくにとっては、もはや「時間」など、何の意味を成さない概念だった。

とにかく、ある瞬間において、ぼくは唐突に木立から抜け出し、陽だまりの中で立ち止まった。どこまでも続く青い空、その下には緑に覆われた地面が広がっていた。ぼくは、やわらかな草むらの上に腰を下ろした。ぼくの視線の先、空と地面が溶け合う辺りに、小さな街の輪郭がぼんやりと浮かび上がっていた。それはあまりにも遠くに在ったが、哀しみにも似た色合いの懐かしさで満ちていた。あれは、内在するぼくの故郷が、空という鏡に映し出されているのだ――そう思った。そして、その街を背景にして、ぼくがたどっているこの川の対岸に、サッカーボールを抱えて佇んでいる少年がいた。Bだった。

五、サッカーボールⅡ

青い空、白い雲、気の遠くなるような空間の広がりだった。時折風が吹いて、大地はどこまでも続き、ぼくは川岸を覆っているやわらかな草むらの上に座り込んでいた。

川の向こう岸に立っていたBは、小脇に抱えていたサッカーボールを空に向かって蹴り上げた。ボールは弧を描いて青空を横切り、やがて彼の足元に戻ってきた。Bは風のきざむリズムに合わせるようにしながら、リフティングの妙技を披露してくれた。ぼくは空を見上げた。青い空、白い雲、気が遠くなるような空間の広がりだった。時折風が吹いて、大地はどこまでも続き、ぼくは座り込んでいた。川のせせらぐ音が、耳に心地よかった。

ふいにぼくの目の前に、白くて丸い物体が出現した。反射的にぼくはそれを両手で受け止めた。ずしつという確かな質感が、掌に熱く残った。Bが突然、ぼくにボールをパスしたのだ。ボールは川を越えて、ぼくのところまで飛んできたのだった。

Bはぼくに向かってニヤリと笑いかけた。ぼくは理由のわからない決まりの悪さと申し訳なき、そしてノスタルジーを感じながら言った。「久しぶり」

「久しぶり」とB。「元気にしてたか」

「さあね」とぼく。「お前は？」

「さあね」 Bもそう答えて、肩をすくめ笑ってみせた。

そしてBは、ぼくがキヤッチしたボールをあごで指し示し、こう言った。「それ、蹴っていいぜ」
「いや、遠慮しとく」ぼくは苦笑交じりに答えた。「お前、忘れたのか？俺、サッカーめっちゃくちやへタクソだったじゃん」

「いいって、そんなこと気にするな。思い切り蹴ってみろよ」

「思い切り蹴ったら、きつと見当違いな方向に飛んで行っちゃうぜ」

「かまわないってば」Bは大笑いしながら言った。「もうそんなこと、全然気にすることないんだよ」

とうとうぼくは折れ、ズボンについた土をはたいて立ち上がった。ぼくはつま先に全身の神経を集中させ、渾身の力でボールを蹴り上げた。青空に向かって、ぼくの蹴ったサッカーボールはどんどん飛距離を伸ばしていった。ぼくは遅れじと、今度は大地を蹴り、ボールの後を追ってめいっばい跳躍した。あのボールを足掛かりにして、もっともっと高く飛び上がるのだ。うまくいけば、いくらでも跳んでいけるはずだった。ぐんぐんとぼくの体は空気を突き抜けて行き、限界まで伸ばしたぼくの足が、先を飛んでゆくボールに掛かった。よし、いいぞ、いける！ぼくは力をこめた。暖かな春の日差しが、青空をどこまでも澄み渡らせていた。